

リヒャルト・デーメル『浄められた夜』 :
1900年前後の創作と検閲

NITTA, Seigo / 新田, 誠吾

(出版者 / Publisher)

法政大学多摩論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei University Tama bulletin / 法政大学多摩論集

(巻 / Volume)

30

(開始ページ / Start Page)

43

(終了ページ / End Page)

57

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009613>

リヒャルト・デーメル『浄められた夜』

—1900 年前後の創作と検閲—

新 田 誠 吾

*Du siehst, die deutschen Dichter wandeln mehr auf Dornen als auf Rosen*¹.

このとおり、ドイツの作家が歩むのはバラよりイバラの道さ。

I. はじめに

リヒャルト・デーメル (1863-1920) は、生前ドイツ語圏を代表する人気詩人の一人であった。シェーンベルク、リヒャルト・シュトラウス、ツェムリンスキー、ウェーベルン、プフィッツナー、シベリウスといった作曲家がデーメルの詩に作曲をした。森鷗外は、欧州の主要な文学作品を翻訳して紹介していたが、明治 42 (1909) 年、デーメルの詩集『けれども愛は』(Aber die Liebe) から『顔』(Das Gesicht) を翻訳している²。しかし現在、デーメルの詩はドイツ語圏でもほとんど読まれていない。シェーンベルクの『浄められた夜』(Verklärte Nacht) のほか、歌曲の原作者として名を留めるのみである。

『浄められた夜』は、詩集『女と世界』(Weib und Welt) に収められ、1896 年に出版された。後年、シェーンベルクは演奏会プログラムに作曲の経緯をつぎのように記している。

19 世紀末、抒情詩で時代の空気 (Zeitgeist) をもっとも代表していたのが、デトレフ・フォン・リリエンクロン、フーゴ・フォン・ホフマンスタール、リヒャ

¹ Richard Dehmel: *Ausgewählte Briefe aus den Jahren 1902 bis 1920*, Berlin 1923, S. 353.

² 川戸道昭ほか編 (2002) : 『森鷗外集Ⅱ』(明治翻訳文学全集《翻訳家編》9)、大空社、p. 124-131. 初出は『心の花』(明治 42 年 1 月)

ルト・デーメルでした。いっぽう音楽ではブラームスが亡くなってから、若い作曲家の多くがリヒャルト・シュトラウスを手本に標題音楽を手がけていました³。

シェーンベルクの『浄められた夜』は、現在でも演奏会で取り上げられる演目である。「時代の空気を代表する」とシェーンベルクに言わせたデーメルの詩集『女と世界』はどのようにして生まれたのか。また、この作品は世紀転換期ベルリンでどのような反応があったのか。これまでわが国でほとんど論じられてこなかったこうした部分に光を当ててみたい。

II.

1. シェーンベルクの『浄められた夜』

初期のシェーンベルクにとって、デーメルの詩は新しい音を探す最初の挑戦になった。後年の1912年、シェーンベルクがデーメルに送った手紙に次のような一節がある。

あなたの詩は、私の音楽の発展に決定的な影響を及ぼしました。詩に触発されて、初めて抒情詩に新しい音を探す必要に迫られたのです⁴。

1898年から1900年にかけてシェーンベルクは数多くの歌曲を作曲した。後に出版されて作品1から3となる曲には、『期待』(Erwartung)、『おまえの黄金の櫛をおくれ⁵』(Schenk mir deinen goldenen Kamm)、『高揚』(Erhebung)、『警告』(Warnung)の4つの詩がデーメルの『女と世界』から採られている。

同詩集収録の『浄められた夜』をもとに、シェーンベルクは1899年12月1日、

³ Arnold Schönberg: Programm-Anmerkungen zu Verklärte Nacht, in: ders.: *Stil und Gedanke. Aufsätze zur Musik.* (Arnold Schönberg. Gesammelte Schriften. 1.), hrg. von Ivan Vojtech, Frankfurt am Main 1976, S. 453.

⁴ Arnold Schönberg (1958): *Briefe.* Hrg. Von Erwin Stein, Mainz, S. 30.

⁵ 原題は『イエスの物乞い』(Jesus bettelt).

弦楽六重奏曲(作品4)を完成させた。その際、「オーケストラではなく室内楽向けに」作曲し、「何らかのあらすじやドラマを描くのではなく、自然を描写し、人間の感情を描くこと⁶」で、他の標題音楽との違いを出そうとした。

ここで、元になったデーメルの詩の内容を見てみよう。

Verklärte Nacht

浄められた夜

Zwei Menschen gehn durch kahlen, kalten Hain;	冬枯れの森を歩く二人がいる
Der Mond läuft mit, sie schau'n hinein.	月がついてきて、二人は顔を見合わせる
Der Mond läuft über hohe Eichen;	月は、高い檜の木の上にある
kein Wölkchen trübt das Himmelslicht,	月夜をさえぎる雲一つない
in das die schwarzen Zacken reichen.	夜空に木々の黒い影が突き出ている
Die Stimme eines Weibes spricht:	女の声がする
Ich trag ein Kind, und nicht von Dir,	お腹の子はあなたの子ではないの
ich geh in Sünde neben Dir.	あなたにも迷惑をかけようとしている
Ich hab mich schwer an mir vergangen.	取り返しのつかない過ちを犯してしまった
Ich glaubte nicht mehr an ein Glück	私には運がないとあきらめていた
und hatte doch ein schwer Verlangen	それでも生きがいを見つけ
nach Lebensinhalt, nach Mutterglück	母親の喜びや務めを味わって見たかった
und Pflicht; da hab ich mich erfrecht,	身のほど知らずにも
da ließ ich schauernd mein Geschlecht	知らない男に自分の身をまかせた
von einem fremden Mann umfassen,	今思うとぞっとする
und hab mich noch dafür gesegnet.	そして私は身ごもった
Nun hat das Leben sich gerächt:	こうして人生の報いを受け
nun bin ich Dir, o Dir, begegnet.	そこであなたに、あなたに出会った
Sie geht mit ungelenkem Schritt.	女の足取りは重い

⁶ Schönberg (1976), S. 453.

新 田

Sie schaut empor; der Mond läuft mit.	見上げると、月がついてくる
Ihr dunkler Blick ertrinkt in Licht.	女の暗いまなごしは、月明かりに吞まれる
Die Stimme eines Mannes spricht:	男の声がする
Das Kind, das Du empfangen hast,	できた子どもを
sei Deiner Seele keine Last,	心の重荷にするな
o sieh, wie klar das Weltall schimmert!	ほら、夜空がこんなに輝いている
Es ist ein Glanz um alles her;	何もかも包み込む輝きだ
Du treibst mit mir auf kaltem Meer,	冷たい海を僕とさまよっているが
doch eine eigne Wärme flimmert	君の温もりを僕は感じ
von Dir in mich, von mir in Dich.	君も僕の温もりを感じている
Die wird das fremde Kind verklären,	その気持ちがお腹の子を浄めてくれる
Du wirst es mir, von mir gebären;	どうか僕の子として産んでほしい
Du hast den Glanz in mich gebracht,	君は僕の心を照らしてくれた
Du hast mich selbst zum Kind gemacht.	君しか考えられなくなった
Er faßt sie um die starken Hüften.	男は身重の腰に手を回す
Ihr Atem küßt sich in den Lüften.	二人の息が空中でキスを交わす
Zwei Menschen gehn durch hohe, helle Nacht.	二人は澄みきった月明かりの夜を歩く

詩は5連から成り、シェーンベルクの音楽はそれぞれの連に対応している。1、3、5連で月夜の森を歩く二人の情景が描かれている。西洋では月は狂気を連想させ、冬枯れの森は死を連想させるため、情景は不気味である。この不気味な情景に挟まれるように、2連で女の衝撃的な告白があり、4連で男が応える。女は妊娠しているが、他人の子を妊娠している。それを男が受け入れることで、冷たい夜の世界に温かさがもたらされる。二人は最初から最後まで歩みを止めず、冬の森を進んでいく。

この曲には禁止されていた属九和音の転回形が使われていたため、ウィーン音楽家協会から総譜を拒絶された⁷。初演できたのは、ロゼ四重奏団によるところが

⁷ エーベハルト・フライターク（宮川尚理訳）（1998）：『シェーンベルク』、音楽之友社、p. 22ff.

大きい。1902年3月18日、ウィーンの楽友協会ホールでロゼ四重奏団にビオラ、チェロを加えた6名で初演が行われた。演奏が終わると、会場は騒然となった。観客同士が「殴り合いの喧嘩になった⁸」とシェーンベルクも述懐している。マスコミの批評もさんざんなものだった。

当時のウィーンは、芸術的な大きな転換を迎えていた。1897年、グスタフ・クリムト、コロモン・モーザー、ヨーゼフ・ホフマンらを中心に分離派が結成された。1899年、クリムトは絵画『ヌダ・ヴェリタス』(Nuda Veritas)を発表する。「裸の真実」という意味をもつ絵には、鏡を手に持つ裸体の女性が描かれている。その上部には、シラーの書いたエピグラム『選択』が引用されている。エピグラムとは警句とも呼ばれ、風刺や洒落を内容にもち、ヘクサメーター（六韻律）とペンタメーター（五韻律）からなる二行詩である。

Kannst du nicht *allen* gefallen durch deine Tat und dein Kunstwerk,
Mach es *wenigen* recht; *vielen* gefallen ist schlimm.⁹

おまえの行いと作品で、万人に好かれることがあるか。

分かってくれる人は一握りでいい。大勢に好かれるようではだめだ。

分離派はその父親世代の芸術を拒絶し、近代人に「真実の顔」を示そうとした¹⁰。シラーの引用には、クリムトの並々ならぬ決意が感じられる。

第1回分離派展は成功した。オープニングには皇帝フランツ・ヨーゼフ1世が姿を現した。5万7千人が来場し、218点の作品が売れた。分離派は、いわば皇帝とウィーン市民から認められたかたちになった¹¹。シェーンベルクは、こうしたウィーンの芸術運動を感じながら、新しい音を求めたのである。

⁸ Schönberg, S. 457.

⁹ Friedrich Schiller: Sämtliche Werke, hrg. von Gerhard Fricke, Herbert G. Göpfert und Herbert Stubenrauch, Band 1, München 1962, S. 313.

¹⁰ カール・ショースキー（安井琢磨訳）（1983）：『世紀末ウィーン』、岩波書店、p. 270ff.

¹¹ C. M. ネーベハイ（野村太郎訳）（1985）：『クリムト』、美術公論社、p. 82-3. 参照

2. デーメルの『浄められた夜』

詩集『女と世界』は、1896年5月10日に脱稿し、同年10月に刊行された¹²。画家ハンス・バルシェック (Hans Baluscheck) による挿絵があり、一艘の帆かけ舟の一方に、竖琴ライアーを弾く天使が座り、もう一方には悪魔が船べりに腰掛けてマンドリンを弾いている¹³。船体には詩と読者への謝辞が書かれている。

Erst wenn der Geist von jedem Zweck genesen	何のためと考えることをやめ
und nichts mehr wissen will als seine Triebe,	もはや己の欲求以外いらなくなれば
dann offenbart sich ihm das weise Wesen	正しかったことが分かる
verliebter Thorheit und der großen Liebe.	愚かにも恋に落ち、大恋愛になったことが
Euch und Mir in Dankbarkeit	読者諸氏と自分に感謝を込めて

この作品が後に再婚するイーダ・アウエルバッハとの出会いから生まれたというのは、先行研究が一致するところである。

デーメルより7歳年下のイーダは、1880年ライン河畔ビンゲン (Bingen am Rhein) に生まれた。イーダが生まれたユダヤ系のコブレンツ家は、代々広大なワイン畑を所有し、大手のワイン醸造所も経営するきわめて裕福な家であった。劇作家で批評家のユリウス・バープは、生前のデーメルを知り、デーメル伝を二度著したが、彼によれば、コブレンツ家は「一度もゲッターに住んだことがない¹⁴」というのが自慢だった。イーダは、1892年のクリスマスに友人から詩集『救済』 (Erlösungen) を贈られ、初めてデーメルの名前を知る。1895年、25歳になったイーダは、ユダヤ系のレオポルト・アウエルバッハ (Konsul Leopold Auerbach) と結婚し、ベルリンに転居する。この結婚はイーダが望んだものではなかった。19世紀の裕福な家庭では、結婚は個人の意思よりも親の意向が優先されるのが通例だった。

アウエルバッハ家は服飾品を扱う小規模事業者で、グリュンダーツァイト (泡

¹² Dehmel (1923), S. 237 および S.252.

¹³ 愛蔵版と上装版には、扉にカラーの挿絵がある。ハンブルク州立・大学図書館リヒャルト・デーメル文庫 (Richard Dehmel Archiv in der Staats-und Universitätsbibliothek Carl von Ossietzky) で筆者が2013年に確認した。

¹⁴ Julius Bab (1926): *Richard Dehmel. Die Geschichte eines Lebens-Werkes*, Leipzig, S. 181. 以降の記述は、S. 181ff. 参照。



【図】『女と世界』の挿絵

沫会社乱立時代)に一財産を築き、「子どもじみた虚栄心から¹⁵⁾」アルゼンチン領事という称号まで手に入れた。名前の前に「領事」を表す *Konsul* がついているのは、そのためである。

1895年にデーメルはフリーランスのプロ作家になった。すでに89年にパウラ・オープンハイマーと結婚し、一男一女をもうけていた。8月、家族と北ドイツの保養地リュージェン島ビンツに滞在していたとき、ベルリンから一通の手紙を受け取る。イーダが作家デーメルに宛てて書いた最初の手紙だった。イーダは、デーメルの詩集『救済』に感銘を受け、「もっとも神聖な『ツアラトゥストラはこう語った』と並べてあります」と書き始めている。デーメルが雑誌『牧神』に寄稿した記事に対して¹⁶⁾、「シュテファン・ゲオルゲが主宰する『芸術草子』の作家を一人も取り上げないのはなぜですか？¹⁷⁾」と素朴な疑問をぶつけた。イーダは『芸術草子』を愛読しており、雑誌の最新号を手紙に同封していた。

デーメルは返信でゲオルゲ派と自身の芸術観の違いを明らかにしている。ゲオ

¹⁵⁾ Bab (1926), S. 185.

¹⁶⁾ Richard Dehmel: *Aus Berlin*. In: Pan. Jg. 1, 1895/96, Heft 2, Juni 1895, S. 110-117.

¹⁷⁾ Richard Dehmel. *Dichtungen, Briefe, Dokumente*. Hrsg. Von Paul Johannes Schindler, Hamburg 1963, S. 182.

ルゲは、パリでマラルメや象徴主義の芸術家との交流から影響を受け、独自の芸術理論を作り上げ、芸術至上主義を標榜していた。

『詩神』が目指すのは、あの人たちが目指すものとはまったく異なります。ゲオルゲは「芸術」は自分のものだと思っています。私たちはそうは思いません。[中略] 彼らが目指すのは芸術のための芸術で、私たちの生は生の芸術です。生きるとは多種多様で、選ばれし者のみに許された神殿ではないのです¹⁸。

デーメルは『芸術草子』を返却するために、8月中旬にレンネ通り（Lennéstraße）5番地のイーダ宅を訪ねた¹⁹。長い黒髪を持つ25歳のイーダは、このときすでに夫の子を身ごもっていた。デーメルは、そこで恋に落ちた。以降、デーメルがティアガルテンのすぐ南側にあるイーダの家に通うようになり、二人の関係は進展していく。

この交際は創作の大きな原動力となった。10月17日に、親友で作家のリリエンクロンに宛てた手紙には、「すごいよ、また詩が書けるようになった。最高に幸せだ。『人生の頁²⁰』が出てから、これまで君に送ってきた詩なんか、ただのクズだ²¹」とあり、旺盛な創作意欲が感じられる。この時期に書かれた詩から、『女と世界』が誕生することになる。

『浄められた夜』は、デーメルにとっても特別な意味をもつ作品である。この詩を書いたことで、新たな作品の着想を得たからである。この詩が成立した正確な日付は現在のところ特定できないが、1895年11月30日から12月1日の間に書かれたと考えてほぼ間違いない。

1895年11月29日、金曜の夜、デーメルはイーダと会い、ベルリンの街を歩いてデートをしていた。ベルリンの南西30kmに位置するポツダムの当日の気温は、最高気温－2度、最低気温－7.7度だったから、ベルリンも一日氷点下だったと推

¹⁸ Dehmel (1923), S. 207.

¹⁹ 以降の記述は Bab (1926), S. 176ff. 参照。

²⁰ “Lebensblätter”. 1925年に刊行したデーメルの詩と散文集。

²¹ Dehmel (1923), S. 216.

測される²²。ベルリンから見えたのは、月齢 12.8 のほぼ満月に近い月であった²³。そのときの様子は、翌日デーメルがイーダに宛てた手紙に書かれている。イーダの宝飾品をねだる記述は『イエスの物乞い』を、また月についての記述は『浄められた夜』を想起させる。

ねえ、オパールの指輪のほうがいいな。ネックレスは僕には似合わない。それにオパールなら昨日の夜のこと、あの月明かりをずっと思い出すだろう。君もそう感じた？ 雲を通ってくるあの輝き。君の手を引いて通りを歩いていたあいだずっとだった。君が僕の手を引いていたときも。何もかもが照らしだされていた²⁴。

12月1日、デーメルは「新たなバラードの形式を見つけた²⁵」とイーダに書き送っている。「ふたりの人間」を主人公にしたバラードの構想であった。『浄められた夜』は、冬の夜にふたりの人間の歩くところから始まっている。デーメルは、このモチーフを発展させようと考えた²⁶。小説『ふたりの人間』(Zwei Menschen)は1903年に発表され、巻頭に『浄められた夜』の詩がタイトルなしに置かれた。

「生の芸術」を目指したデーメルにとって、『浄められた夜』はイーダと共に人生を歩んでいく決意を込めた作品だったのである。

Ⅲ．デーメルの詩集をめぐる論争と検閲

1. ミュンヒハウゼンによるデーメル批判

『女と世界』が出版から半年後、「リヒャルト・デーメル」と題する一本の批評

²² Wetterzentrale で検索した。http://www.wetterzentrale.de/topkarten/fskldwd.html (2013年10月18日)

²³ 月齢の計算は、「こよみのページ」で行った。満月は3日後。
http://koyomi.vis.ne.jp/mainindex.htm (2013年10月18日)

²⁴ Dehmel (1923), S. 224-5.

²⁵ Dehmel (1923), S. 225.

²⁶ Dehmel (1923), S. 261.『浄められた夜』は『女と世界』第2版には収められなかった。

が雑誌『批評』に掲載された²⁷。著者はベリース・フォン・ミュンヒハウゼンで、ベルリン大学で法律を専攻する学生だった。この批評がプロイセンの文壇に論争を引き起こし、さらにデーメルは刑事裁判を受けることになる。

ミュンヒハウゼンは、1874年ゲッティンゲンに生まれ、ハイデルベルク、ミュンヘン、ゲッティンゲン、ベルリンで法学、国家学を修めた²⁸。1897年に『詩集』を刊行し、以後詩人として活動を始める。ミュンヒハウゼンの芸術観は、保守的で民族主義的なものであった。ドイツ人によるドイツの伝統文化に根ざした文学を理想とした²⁹。そのため、「モデルネ」と呼ばれた新しい芸術には容赦ない批判を浴びせた。1932年、ハンス・グリム、コルベンハイヤー、ヨースト、エミール・シュトラウスといった作家と「ヴァルトブルク派」という作家グループを立ち上げた。1933年ナチスが政権につくと、そのメンバーが、空席となったプロイセン芸術アカデミーの理事に就任する。ミュンヒハウゼンの独特の文学観は、政権と相容れないこともあったが、最後までナチス政権から離れることはなかった。1945年3月、自ら命を断った。

このミュンヒハウゼンの批評は、「今の流行りは我の強い女性だが、うまく行ったためしはほとんどない。いい作品は偶然の産物にすぎない」という書き出しで始まる。オスカー・ワイルドの『サロメ』が1893年に発表され、一大センセーションになった。のちに、アルバン・ベルクがオペラ『ルル』を作曲するフランク・ヴェーデキントの『地霊』は1897年に刊行された。

こうした状況を憂うミュンヒハウゼンは、『女と世界』を「現代抒情詩の名作」とする見方に真っ向から反論する。デーメルの詩を2つのグループに分け、一方は「幼稚でばかばかしく」、他方は「支離滅裂で分かりにくく、気分を害するところがある」と論じた。「新奇さ」には驚かされるが、「不自然さ」が不快の原因と分析した。このミュンヒハウゼンの分析は、ある意味正確である。デーメルは、

²⁷ Börries Freiherr von Münchhausen: „Richard Dehmel“, in: Die Kritik 4 (1897), Nr. 132, S. 708-713 (10.4.1897).

²⁸ Werner Mittenzwei: „Münchhausen, Börries Freiherr von“, in: *Neue Deutsche Biographie* 18 (1997), S. 525-527 [Onlinefassung]; URL: <http://www.deutsche-biographie.de/pnd118785273.html>. 参照。ただし、『詩集』刊行年は筆者が1897年に改めた。

²⁹ こうした考えは、けっしてミュンヒハウゼン独自のものではなく、作曲家ワーグナーが1850年に変名で発表した論考「音楽におけるユダヤ性」に代表されるように連綿と受け継がれてきたものである。

自然主義のように自然を忠実に描写しようとはしていなかったからである。

ミュンヒハウゼンは、デーメルの2つの詩『聖霊とともに』(Mit heiligem Geist)、『慰めのヴィーナス』(Venus Consolatrix)の一節を取り上げ、冒とく罪にあたることを指摘した。たとえば、『慰めのヴィーナス』から引用された箇所では、つぎのような聖母マリアの描写がある。

und öffnete das Kleid von weißem Plüsch	白いブラッシュの服の前をはだけ
und zeigte mir mit ihren Fingerspitzen,	その指先で私に見せたのは
die zart das blanke Licht des Sternes küßte,	星がやさしく輝きの口づけをするなか
die braunen Knospen ihrer bleichen Brüste,	白く透き通る胸の茶色の乳首

「私が確認したところでは、デーメルはユダヤ人である」や「デーメルは妻の不倫を認めている」といったミュンヒハウゼンの事実誤認や思い込みの記述もある。しかしその論調は一貫して攻撃的である。ミュンヒハウゼンは、デーメルを刑事告発し、ベルリンの裁判所で審理が開始されることになる。

2. 論争と裁判

当時、プロイセンの刑法には、94-101 条「不敬罪」(Majestätsbeleidigung)、166 条「冒とく罪」(Gotteslästerung)、184 条「わいせつ物頒布等の罪」(Unzucht)の規定があった。1889年にフランク・ヴェーデキントは不敬罪で、1895年にはオスカー・パニッツァが冒とく罪でそれぞれ有罪判決を受けている。さらに184条には不道德な芸術作品や演劇上演を処罰する項(いわゆる「ハインツェ法」Lex Heinze)が追加され、1900年から施行された。したがって、文学者に限らず、プロイセンの芸術家たちは、しばしば検閲の対象になった。

デーメルもけっして例外ではなかった。ミュンヒハウゼンの告発以前に、デーメルは一度裁判を経験していた。1893年12月、アウグスブルク聖職者新聞の告発を受けて、ミュンヘン検察庁は、出版社と書店にある詩集『けれども愛は』をすべて押収した。掲載された詩『ヴィーナスの変容』(Verwandlungen der Venus)に、

「3箇所の神への冒とく、10ないし12箇所のわいせつ表現が認められる³⁰⁾」ためだった。しかし、1894年5月28日、ミュンヘン第一地方裁判所第二刑事部は、デーメルに無罪を言い渡した。

ミュンヒハウゼンの記事と告発は、『批評』誌上で論争を引き起こした。詩人のヴィルヘルム・フォン・ショルツは97年6月5日号でデーメルを擁護した。これに対し、法学部の学生でその後検察官になるカール・ブルケは「これは動物の生殖行為で、獣そのものだ³¹⁾」と反論した。

デーメルの裁判は、ベルリン・パンコウにある王立第二地区裁判所 (das Königliche Amtsgericht II) で、おそらく1897年6月22日に始まった。デーメルは6月23日に裁判所宛ての公開状を書き、弁明を行った。そこには『女と世界』に対する作家自身の芸術的信条が吐露されている。

本書で表現しているのは、一人の人間が聖なる良心の命令に背いて、肉欲におぼれていくさまでです。[中略] 虜になる魅力というのは、当然どんな情熱にもあるものですが、これを隠したり、言わないのは、もちろん芸術家の仕事ではないでしょう。つまり、人が動物的な欲動を持っていることを人間の精神にはっきり知らせる者は、だれであれ、道徳を説いて告発を行うような者より、真の意味で道徳に貢献しているということです³²⁾。

判決は8月30日に言い渡された。『聖霊とともに』は「婚姻の破綻を賛美しているとは認められない³³⁾」として無罪になった。しかし、『慰めのヴィーナス』については、わいせつで神を冒とくする内容を認定して、119ページから121ページまでの廃棄が命じられた。時効によりデーメル個人に対する刑罰はなかった³⁴⁾。

判決に対するデーメルの憤慨は、翌日にイーダに宛てた手紙から読み取れる。「素

³⁰⁾ Heinrich H. Houben: Verbotene Literatur. Von der klassischen Zeit bis zur Gegenwart, Bd. 1, Berlin 1924, S. 111ff. 以降の記述も参照。

³¹⁾ Kaschke, Lars: Aus dem Alltag des wilhelminischen Kulturbetriebs: Börries von Münchhausens Angriff auf Richard Dehmel. In: *Text und Kontext* 20 1997, S. 39-40.

³²⁾ Dehmel (1963), S. 126.

³³⁾ Houben, S. 115

³⁴⁾ Houben, S. 116-7. 裁判資料は失われており、判決理由を伝えるのは本文献のみである。

晴らしい出来の詩が一つ盗まれた、いや殺された！」とあり、ミュンヒハウゼンを「犬」と呼び、「もし会ったら、顔に唾をかけて一発殴ってやる³⁵」と怒りをあらわにしている。

判決後、デーメルを支持する作家、なかでもオットー・ユリウス・ビアバウムとユリウス・マイアー＝グレーフェが50人の名だたる作家にアンケートを実施した。刑法の条項の是非ではなく、芸術を告発する行為の是非を問うたのである。これは明らかにミュンヒハウゼンに対するあてつけだった。回答した44人全員が告発者を批判する結果が、1897年11月7日の『フランクフルト新聞』に掲載された³⁶。

ミュンヒハウゼンはこれに対抗して作家にアンケートを取ったが、回答はわずか8名だった。そこで親交のあった作家からアンケートを追加し、結果を1897年12月8日の『ドイツ新聞』に載せた。デーメルの詩について、たとえばパウル・ハイゼは「類を見ない粗さと下品さ」と評し、カール・ブッセは「卑猥」と切り捨てた。さらにミュンヒハウゼンは、名誉毀損でビアバウムとマイアー＝グレーフェを刑事告訴したが、起訴には至らなかった。

しかし、新たにデーメル批判に加わったのが、雑誌『現代』(Die Gegenwart)である。1872年にベルリンで創刊された文芸・芸術週刊誌は、多くの読者を獲得していた。この背景には、『現代』の社主、編集主幹、発行人を兼ねるテオフィル・ツォリングが、新興のシュースター&レフラー出版に個人的反感を抱いていたことがある³⁷。また、研究者のカシュケは詳細な調査から、社主ツォリングと検察との繋がりの可能性を指摘している³⁸。出版社には家宅捜索が入り、わいせつ物容疑でデーメルの『けれども愛は』など出版物が押収された。

1899年7月27日、デーメルを含む作家3人、画家3人と出版社がベルリン第一地方裁判所にわいせつ物頒布等の罪で起訴された。1900年3月22日の判決では、『現代』やミュンヒハウゼンの予想を裏切り、出版社にわずかな罰金刑のみ言い渡された。デーメルは無罪だった。この判決について、『現代』は完全に沈黙し、以

³⁵ Dehmel (1923), S. 268.

³⁶ Houben, S. 117ff. 参照。以降の記述も同書を参照。

³⁷ Houben, S. 123.

³⁸ Houben, S. 123. Kaschke, S. 45.

降、ミュンヒハウゼンのデーメル批判も終息する。

一連の論争と裁判によって、詩人デーメルの名前はドイツ中に広まることになった³⁹。

3. 帝政下の文化政策

ビスマルクが首相を退任したあとのヴィルヘルム2世による帝政下では、モデルネと呼ばれる新興の芸術運動に対して、国による圧力が強まった。モデルネとは、ハインリヒとユリウスのハルト兄弟が1884年に発表した「文学とは本質も内容もモデルネでなければならない」とするスローガンによる⁴⁰。

歴史学者モムゼンによれば、こうしたプロイセンの文化政策は、ヴィルヘルム2世と画家アントン・フォン・ヴェルナーが個人的影響を及ぼしていたから、モデルネの芸術は拒絶された⁴¹。ヴェルナーはプロイセン芸術アカデミーの総裁で、皇帝の信認も厚かった。

その象徴的事件は、1892年に起きる。一つは、ゲアハルト・ハウプトマンの社会派戯曲『織工』(Die Weber)の上演禁止命令である。この命令は、ヴィルヘルム2世自身が下した⁴²。また、同年にベルリンで開催されたエドヴァルト・ムンク展は、ヴェルナーが中止させ、大スキャンダルとなった。「ベルリン分離派」がベルリン芸術家協会から脱会するのは、この6年後である。

IV. まとめ

ここまで、デーメルの『浄められた夜』がどのようにに成立し、デーメルの詩に対して当時どのような反応があったのかを考察してきた。

³⁹ Bab, S. 203.

⁴⁰ *Die Berliner Moderne. 1885-1914*, hrg. von Julius Schutte und Peter Sprengel, Stuttgart 1987, S. 186.

⁴¹ Wolfgang J. Mommsen: Die Herausforderung der bürgerlichen Kultur durch die künstlerische Avantgarde. Zum Verhältnis von Kultur und Politik im Wilhelminischen Deutschland, in: *Geschichte und Gesellschaft* 20, Göttingen 1994, S. 434.

⁴² Mommsen, S. 433.

リヒャルト・デーメル『浄められた夜』

ドイツ帝国の立憲主義は、国民の権利や自由を制限し、国による統制が保障されたものだった。この状況は、大日本帝国憲法下の日本も同じである。ウィーンでは、分離派による新たな芸術運動に対し、国による弾圧はほとんどなかった。ウィーンの芸術家は旧来の伝統に対抗したが、ベルリンの芸術家は国家の圧力のもとで活動を続けなければならなかったのである。